

小林勝「目なし頭」論

- 「過去」の断絶と継承 -

崔俊鎬*

植民二世作家である小林勝はこれまで自らの植民地体験を背景に多くの作品を発表してきた。本稿で取り上げる「目なし頭」は彼の晩年の作品群に属しており、時代の流れと共に変化してきた作家の植民地認識と当時の日本社会に対する認識が混在している。また、肺手術によって引き起こされた肉体的・精神的な転換期において、これからの作家の進むべき道を決定づける重要な役割を果たしている作品でもある。

過去の記憶との断絶と継承をキーワードに、植民地における朝鮮人と日本人植民者の間に横たわる埋めがたい間隙と、戦後日本社会においてマイノリティーとして生き続ける在日朝鮮人たちとの向き合い方が、長い間の社会主義運動の実践の集大成としてこの作品には描かれている。自身の過ちと差別意識に対する鋭い眼差しと、それによって浮き彫りにされる異民族間の相互理解の困難さと挫折、そしてそれら全てを乗り越えて再び戦後の日本社会において厳存する差別と偏見へ立ち向かおうとする作家の決意がこの作品からは読み取れる。

歴史の証人として自らに課せられた重苦しい義務を放棄することなく、自らの内面に潜む醜悪な恥部をさらけ出しながら、戦後の日本社会を生きる日本人植民者のありのままの姿を提示し、常にその最前線に立ち続けようとする作家自身が持つ内部の葛藤がうまく描かれている。またこの作品はそのような自己批判を伴った告白的な作品であると同時に、沈黙し続ける多くの植民地体験者への警告のメッセージをも内包している。

キーワード：植民者、植民地体験、在日朝鮮人、植民二世、自己批判

1. はじめに

本稿は植民二世作家小林勝の晩年の作品「目なし頭」を分析したものである。植民地朝鮮の晋州で1927年に生まれた小林勝は幼少期を慶尚南道一帯で過ごし、敗戦直前に内地へと帰った。18歳で陸軍航空

* 全北大学校 日語日文学科 講師

士官学校へ入学し、特攻要員となった彼は1945年8月の日本の敗戦によって復員。軍国少年であった彼はその反動から、戦後民主主義へのめり込んで21歳の時に日本共産党へ入党、新日本文学会を拠点として活動を始める。以後、党内紛争やレット・パージなど、時代の荒波に揉まれながら自らの進むべき道に迷っていた彼は、朝鮮戦争二周年にあたり行われた大規模なデモに参加し、火炎瓶を投げて現行犯として逮捕される。東京拘置所で小林は在日朝鮮人運動家たちと出会い、いまだに日本社会に厳存する植民地主義の残滓に気付き、自身の植民地体験を作品化することを決意する。

以後、「フォード・一九二七年」「牛」「鮎」など一連の植民地朝鮮関連の初期作品群¹⁾を発表するものの、その多くは自らの体験に基づいた断片的な記憶の羅列とノスタルジックな望郷のイメージが浮き立つ内容となっている。1957年に第一創作集である『フォード・一九二七年』を講談社から刊行した小林勝は、その2年後に先の火炎瓶事件によって懲役1年の実刑を受けて収監される。1960年に仮釈放となった彼は「架橋」「無名の旗手たち」などを発表して、引き続き植民地朝鮮と日本との関係をテーマとして創作活動に専念する。しかし、1964年10月に肺結核が発見され2度に渡る肺切除手術を受けることとなる²⁾。本稿で取り上げる作品「目なし頭」はこの肺手術まもない時期から執筆されており、作品の内容と作者の実生活とは緊密に連動している。作品の主人公である沢木晋は、作家小林勝同様に植民地朝鮮生まれとして設定されており、また最近肺手術を受けたばかりの人物として描かれている。したがって、本稿では「目なし頭」をフィクションとして捉えると共に、執筆当時の作家小林勝の自伝的な要素が反映された作品としてとしても捉え、これらの総合的な分析を試みる。

1) 小林勝の初期作品群に関しては磯貝治良(1982)「原風景としての朝鮮—小林勝の前期作品」『季刊三千里』第29号、三千里社、pp.207-217.に詳しい。

2) 作家の生涯については小林勝(1976)「小林勝略年譜」『小林勝作品集』第5巻、白川書院、pp.398-406.を参照。

2. 「目なし頭」の先行研究

作品「目なし頭」に関する先行研究はいまだ満足する程度ではないものの、いくつかの先行論が存在する。まず川村湊の「小林勝外伝」³⁾を検討してみる。川村湊は小林勝の全ての作品群をそのテーマ別に六つに分けているのだが、「目なし頭」は〈朝鮮体験〉と〈共産党体験〉、そして〈闘病体験〉の三つのテーマが混在した作品として分類されている。またこの作品は作家小林勝の朝鮮に対する贖罪意識が強固に表れた作品であり、そのためか作品の中に描かれている朝鮮が贖罪の対象であって、現実的な個人や国家の存在とは切り離されている、観念的で抽象的なものでしか描かれていないと批判する。

次に取り上げる先行論は池田功の「小林勝における朝鮮一植民者二世の屈折」⁴⁾である。この論文で池田は小林勝の作品が掲載された雑誌の傾向による朝鮮像の相違を分析しているのだが、「目なし頭」は「蹄の割れたもの」「架橋」と共に1960年代に左派系文芸誌であった『新日本文学』ではなく商業誌である『文学界』に掲載されていると指摘する。そして、これら三つの作品には小林勝の分身的な存在が主人公として登場し、作品内では朝鮮に対して複雑な心境を示すと述べる。つまり、「目なし頭」という作品は朝鮮に対する主人公の深い屈折と時には激しく噴き出してくる怒りのようなものが描かれていると分析する。

田所泉は「『故郷』と作家との闘い」⁵⁾の中で「目なし頭」は作家小林勝がいちばん身近な闘病体験を軸に、過去のすべての体験を一気に串刺しにとらえようとした作品であるといい、それ自体はぎくしゃくした作品であるものの、作家の創作活動における不屈さと不敵さが垣間見れると評価する。ただ、作品の「語り」においては私小説的な傾向が浮き立っており、作家の分身としての作中人物に対する読者の理解を前

3) 川村湊(1996)「小林勝外伝」『文学界』5月号、文芸春秋、pp.278-296.

4) 池田功(1991)「小林勝における朝鮮一植民者二世の屈折」『明治大学大学院紀要』第28集、明治大学大学院、pp.1-19.

5) 田所泉(1967)「『故郷』と作家との闘い - 安部公房、小林勝、高井有一の最近作をめぐって」『新日本文学』12月号、新日本文学会、pp.136-143.

提とした書き方がなされている点は不満に思われると指摘する。

以上、3編の先行論文を簡略的にまとめてみた。「目なし頭」という作品が小林勝にとっては珍しく長編小説であったせいも、論者によって注目する観点が異なり、また作品の内容と形式に対する評価も多様である。それにもかかわらず、「目なし頭」という作品が作家小林勝の晩年の闘病生活中に書かれた、それまでの植民地朝鮮をテーマにした先行作品を総括する意味合いを持つと同時に、作家の分身的な主人公を登場させて当時の日本社会における在日朝鮮人および植民地問題に対する作家の認識が色濃く反映された作品であるという評価は共通している。内容分析においては、作家の朝鮮へのこだわりと登場人物である在日朝鮮人によって展開される、イデオロギー性の強い作品として評価されているのだが、作品の中に散在する戦後日本社会を生き抜く植民者としての主人公の意識の変遷は捉えられていない。したがって、本稿ではこれらの先行研究を踏まえながら、作品にみられる過去と現在にまたがる記憶によって引き起こされる主人公の内部の葛藤の様相と、それによって変化していく植民地朝鮮に対する認識の全容を明らかにする。

3. 「目なし頭」の内容分析

3.1 「過去」への扉

主人公である沢木晋は結核のため2度における肺手術を余儀なくされた人物である。彼は手術後おとずれた身体能力の低下と精神的な異常より日常生活において不安を抱く。療養所での3年間、彼の神経は外部と断絶されたまま内部にのみ向けられ、自分の身体から切り離された肺臓が目の前に立ちはだかっているような錯覚に陥る。肺手術以前はいかなる苦痛も伴わず、むりに意識することもなく営んできた平凡な日常が、今はまったく異なった形で彼に襲い掛かってくる。その変化に対して彼は言いようのない不安と恐怖を覚え、またこのような

言葉に表しがたい異様な感覚は彼に手術前の生活を実体のない、透明な虚像と捉えさせ、また奇妙な断絶感を覚えさせた。このように沢木は手術後の後遺症によって自らこれまで歩んできた過去の生涯を実体のない虚像と感じ、また過去と現在との奇妙な断絶感に戸惑う。しかし作品の冒頭において沢木を不安と恐怖に陥れる要因の具体的な内容は示されない。そして物語は彼の頭に突如として現れ、長い間閉じられた黒い扉を押し開けようとするある朝鮮人への記憶に移る。

沢木は自分と同じ肺病で入院し、手術後の精神的な異常に困惑して相談に来た朝鮮人患者である宗安男のことを想起する。自身の精神に異変を感じ始めた沢木は、その朝鮮人患者と同じことを体験しているのではないかと不安に駆られる。当時救いの手を求める宗安男に背を向けてしまった沢木は、今その朝鮮人と同じ状態に陥った現実を直視し、過去の自らの行動を後悔する。しかしその瞬間、沢木の頭の中に再び「それだけじゃない、お前が宗安男にやったことはそれだけで終わりではないぞ」⁶⁾という声が聞こえる。つまり沢木の後悔と懺悔は表面的には宗安男の苦しみと嘆きを理解し最後まで付き合わなかったことに対するものだが、頭の中のもう一つの声は沢木の意識の深淵に横たわる何か別のものとの繋がりを連想させようとする。そして自分の潜在意識の中に無理やり入り込もうとするその声に抵抗する沢木に「お前はおれの道を歩いてきた。しかしその道は三年前にぷつりと切れ、その先にあるものは巨大な空虚のみだ、そしてその空白の上に立って、無力な別の何ものかとなったお前が未知の世界を前にしてふるえながら立っているのだ」⁷⁾という声が再び聞こえる。この頭の中の声は朝鮮人患者の苦しみと嘆きを真摯に受け止められなかった沢木の態度を問題視しするのではなく、そのような過去の過ちをいかにも容易く解消させ、過去の出来事として処理してしまう沢木の態度を批判している。

手術後の肉体的な衰えと共に起きた精神的な異常に対して沢木は担

6) 本稿における作品の引用はすべて小林勝(1970)『チョッパリ』三省堂所収の「目なし頭」からとする。この箇所引用はp.178.から。

7) 前掲「目なし頭」 pp.178-179.

当医である萩本医師に一連の症状を素直に打ち明けることができない。なぜならば自分の症状を聞いた後、担当医の口から例の宗安男と同じ後遺症だと宣告されることへの恐怖心のためである。診察室を出て病棟の横にある林の中のベンチに座った沢木は、最後に担当医から聞かされた言葉を思い返す。たとえ以前のように何の苦痛も感じず坂道を登ったり、勢いよく走り回ることはできなくても、これから次第に身体が回復していくことが期待されるという希望的な言葉であった。この20年間沢木は社会主義運動のために走ってきた。イデオロギーを実際に生きた歴史の中で自らの身体をもって直接実践することで、少しずつ自分だけの道というものを切り開いてきたのである。しかし、もうこれからは過去のように「走る」ことは永遠に不可能である。歴史という巨大な渦に巻き込まれながら、その一瞬一瞬を現場で直に触れ合いながら生きてきたのをなによりもの誇りと思う沢木にとって、肉体の限界によって引き起こされた歴史と共に走れないという事実は大きな挫折であった。沢木は林の中へ一人で歩きだし、その奥で古ぼけた大きな木造の建物を見つける。彼は白いレッテルの貼られたビンが標本棚の上にぎっしりと並んでいる部屋に入った。ガラスビンは隣の部屋にも、その隣の部屋にも一杯並べられてあった。沢木がビンに貼られたレッテルに書かれている文字を読み始めると、その中身は突然人間の肺臓の一部へと変わった。偶然入ったその建物は、これまで結核などの肺病によって死んだ患者たちの肺臓の一部がガラスビンに保存されている倉庫であった。ビンの表面に書かれている患者の名前と死亡した日付を一つ一つ眺めていくうちに、沢木は肺臓の一部が身体から切り離されていながらも、むしろここにおいてその持ち主を代表する存在として表面に書かれた「時間」を停止させたまま、永遠に生きているように思えた。そして偶然にも沢木がそれに気づき始めた瞬間、彼は「昭和十三年」と書かれたビンを目の前にして、「お前が今むかいあっている、小さな穴の無数にあいた、今にも崩れそうな壁面こそ、人間の歴史のメスが鋭く切断した昭和十三年という「時間」の切断面そのものなのだ⁸⁾と語りかける声を聞く。

8) 前掲「目なし頭」p.190.

ここに登場する倉庫は、まさしく人間と時間が剥製化された「歴史」という場所そのものに対する隠喩に違いない。作家は歴史を単純な文字や文章の羅列として提示するのではなく、人間の一部である臓器という象徴を用いて時間とその時間を占有した人間の集合によって成立する歴史という抽象的な概念を視覚化して見せる。これまで沢木は、肺臓の切除によって変質した身体と、その変わった身体のせいで外部との交感が以前とは違った異質なものに感じ、また手術の後遺症かもしれない精神的な異常に苦しめられながら、現在と過去の自身が断絶されている経験をしてきた。そして、そのような断絶によって過去という時間が忘れられることを惜しみながらも、一方ではまた長らく自身を束縛してきた拘束から放たれ、新しく生まれ変わる自由と解放への欲望をも感じてきた。沢木を拘束していたものは、これまでの社会主義運動と実践に他ならない。そして今沢木はその運動と実践に別れを告げる絶好の言い訳を見つけ出した。病魔によって侵された身体のため、不本意ながらこれまでの運動と実践は過去の栄光とし、不安定ながらも自由に満ちた未来に向けて彼は一步踏み出そうとしていた。このように、沢木が自分の過去と別れを告げようとした瞬間、「埋没してしまう過去などというものはあり得ない」⁹⁾と眼の前の肺の壁たちが彼に語りかける。その瞬間、昭和13年という時空間が肺の壁たちの語りかけによって今まさに沢木の眼の前に厳存しているかのような幻覚を感じる。そして、その忘れ去られたと思っていた、いや自ら忘れていた昭和13年という日付と共に沢木の頭の中に浮かび上がったのは、植民地朝鮮の風景と李景仁という朝鮮人の姿である。

3.2 「昭和十三年」の植民地朝鮮

植民地朝鮮の晋州。母親の使いで手籠に卵を入れて李景仁の家の前に佇んでいる沢木は、李景仁の弟である李トシヨクがいまにも物陰から飛び出しては来ないかとびくびくしていた。李景仁の家は8人家族

9) 前掲「目なし頭」p.190.

で両親がまともに働けないため、子供たちは皆栄養失調にかかって腹を減らしており、このような家を一人で支えているのが農林学校で働く李景仁であった。沢木が生まれ育った植民地朝鮮の晋州には玉洞という朝鮮人町があった。市場を中心とするその場所は幼い沢木の眼からすると異国的な情緒で溢れていた。しかし、当時の植民二世たちはその朝鮮人街への接近が禁止されていた。それでも朝鮮人街の異国的な情緒への憧憬と好奇心によって多くの植民二世たちはそのタブーを度々破っていたが、そこはまた彼らが恐れる李トショクの根拠地でもあった。李トショクは朝鮮人街に遊びに来る日本人少年たちを見つけ出しては、腕力にものをいわせて彼らの所持品を強奪した。李トショクによって暴力を振るわれ、物を奪い取られる日本人少年たちであったが、誰一人としてそれを親たちに告げ口しなかった。李トショクの存在を死ぬほど憎んでいるにも関わらず植民二世たちは自らのプライドのため親たちに助けも求めず、また植民地の支配者として振る舞うこともままならず、屈折した状況の中で生きていた。そんなある年の冬、町では「独立運動」と関連する事件が起きた。農林学校の小使いをしていた李景仁が真っ先に警察に捕まった。沢木にとって李景仁は優しい朝鮮人であった。彼は沢木のために虫を取ってくれたり、櫂を作ってくれたり、釣りを教えてくれたり、そして朝鮮人街の市場で朝鮮餅を買ってくれたりして、両親からは教わるここのできない植民地朝鮮の様々な姿を体験させてくれる存在だった。事件の後、李景仁は警察署で血を吐いた。おそらく警官たちによる拷問のせいであったに違いない。その後、李景仁は農林学校を首になり、病身でありながら日雇い労働者となったが、過酷な労働によって蝕まれた身体はとうとう回復できず、寝たきり状態になってしまった。

李景仁の家にあるオンドル部屋を覗いた沢木は、その薄暗い場所から立ち昇る邪悪な匂いを嗅いで思わず眉間に皺を寄せながら後ずさりした。沢木が不安と恐怖を覚えながら微かな声で李景仁の名前を呼びかけると、その邪悪で薄暗い部屋から彼の姿が現れた。痩せ衰えて黒ずんだ眼をもつ、変わり果てた李景仁の姿に戸惑いを隠せなかった沢木であったが、警察署で血を吐いたのは日本人警官から拷問を受けたせいなのかと、思い切って彼に聞いた。しかし、李景仁は「そんなこ

と、かんけいないよ」¹⁰⁾と、ゆっくりと突き放すように答えた。その口調はこれまで沢木が李景仁から一度も聞いたことのない冷酷なものであった。李景仁の態度に心が傷ついた沢木は母親から預かった卵の籠を置いて早くその場を立ち去りたかった。李景仁は同情などいらないとでもいうように、頑固にその卵を拒否し続ける。そして自分の母親は李景仁のことを心配しているのだという沢木に対して、彼は冷たい笑みを顔に浮かべながら「お前らが、何をいうか」¹¹⁾と呟くのであった。この瞬間、沢木は自分の母親のせっかくの思いやりを拒否したこの朝鮮人に対して心の中から激しい憎悪を覚え、「朝鮮人! 鮮人! くそつたれ! 肺病やみ! 共産主義! 独立運動! それの裏切り者! 恩知らず! 死んでしまえ、鮮人!」¹²⁾と心の中で叫んだ。沢木の心の声を聞き取ったかのように李景仁は怒りながら「かえれ!」と声を振り絞って叫んだ。そして沢木が持ってきた卵の一つを手にとって投げ出そうとした。沢木はこれ以上耐えられず泣きながら走り出して李景仁の家を出た。彼は生まれて初めて幼い自分にはまったく理解のできない、何か得体の知れない恐ろしいものを知ったような気がした。

ここで沢木は二つの状況に挟み撃ちされている。まず過去の自身の頭の中に理想化されている李景仁の存在が、植民地の過酷な現実によって変質してしまった状況である。そしてこの状況に混乱をきたし、期待値が高かった分、李景仁の変質に言い表せないような困惑を覚え、その心の衝撃はやがて相手に対する憎悪へと激変した。また、植民地支配の状況下において大人たちの世界を中心に自分は疎外されたまま進行していく、歴史的な出来事から逸れている無力な己の存在に、李景仁との関係の破綻を通して直面することとなる。植民地朝鮮の現実の不意打ちされた沢木はそれらを否定しようとするだけで、李景仁に代表される朝鮮人を理解しようとはしない。幼い植民者は李景仁が自身の頭の中に焼き付いている優しい朝鮮人としあり続けることを願うものの、それはあくまでも支配者側に立つ日本人植民者の傲慢

10) 前掲「目なし頭」p.200.

11) 前掲「目なし頭」p.202.

12) 前掲「目なし頭」p.202.

と自己中心的な思考に他ならない。小林勝はこのような植民二世の態度を作品に描くことで、植民地の現実を直視することができなかった、自らの過去に対する批判的な接近を試みる。そして、戦後日本社会において同様の体験をしたにも関わらず、相変わらず沈黙し続ける多数の植民二世たちに向けて、朝鮮および韓国との信頼関係を築くことの難しさを示す。異民族間の友情という一見華やかな輝きは、一瞬の社会的および政治的な渦巻きによって容易く破壊される過程を描くことで、植民二世たちが認識する皮相的な植民地朝鮮人の姿のみが彼らを形成する全てではなと指摘する。日本人植民者として理解し難い、また接近することすらままならない、もっと深い場所に形成されている彼ら独自の世界があることを、準支配者である植民二世は李景仁によって代表される朝鮮人との関係を通して突きつけらる。

過去の記憶から現実へと戻ってきた沢木は計り知れない疲労感に見舞われる。これまで沢木は一般的な人々同様に時々自らの過去を振り返ってきた。しかしそのように「振り返る」過去とは、どこか傍観的な意味合いを彼自身に与え、落ち着きのある場所から眺めるような態度を取らせた。今回の体験のように直接その過去へと戻り、その時空間であたかも「生きている」ような感覚は与えられなかった。過去とは決して埋没して忘れ去られないということを作家は主人公である沢木を通して先の引用部において如実に示す。言い換えれば、過去とは常に想像もし得ない姿で突如として現れ得ると沢木を通して訴えかけている。そして不意に眼の前に現れた過去と直面した我々はいかなる態度でそれに向き合うべきかを以後の沢木の肉体的および精神的な葛藤をもって提示していく。

沢木は自分に突然忘れていた過去を想起させた昭和13年と書かれたピンを眺めながら、一人一人の名前を読み上げていく。そして、昭和13年という同じ時空間の中に埋もれた李景仁の死について思いを巡らす。たとえ日本人ではなくても、また今眼の前に並ぶピンの中になくても、李景仁の死から昭和13年という時空間を切り取ることはできない。なぜなら、李景仁は朝鮮王朝でもなく北朝鮮でもなく、そして韓国でもない、すなわち大日本帝国の植民地朝鮮の町で、臣民の一人として最期を迎えたからである。たとえ彼の死はすでに日本人

および朝鮮人たちの脳裏から消し去られたとしても、永久に彼の死から昭和13年の日本という象徴性を排除することはできない。昭和13年の日本がもつ象徴性とは、単に植民地支配という政治性による「大きな物語」だけを指しているのではなく、李景仁の短い生涯が営まれた故郷の地とそこに入ってきた日本人の商店と学校、警察署や裁判所、工場と郡庁などであり、また沢木の両親に代表される植民一世たち、そして究極には植民二世である沢木自身の存在である。つまり李景仁の死と直結している帝国日本の公権力と共に日本人植民者たちも、また彼の死の責任から逃れることはできないという明白な事実から眼を逸らしてきた沢木のこれまでの態度が追及される。しかし、この段階においても沢木は自分の頭の中に甦った李景仁の死が、現在の自分にとってどのような意味合いを持つのか理解できてない。正確に言えば理解しようとしていない。ただ沢木は恐ろしい自分の過去の記憶とそれによって自分に課せられる、また露呈される暗い一面から逃げることに必死になっているだけである。

3.3 隣人としての在日朝鮮人

ある日の夕方、沢木は机の前に座って李景仁と李トショクについて何か思いつくことを記すためノートを取り出した。すると突然「赤い庭」という言葉が頭の中に浮かび、その後は連鎖的に赤いものたちが次々と浮かび上がった。日本の風景とは違う植民地朝鮮を象徴する赤い色。残酷で乾燥した自然と、その自然から生まれ育った人々、そしてその中の一人がすなわち李トショクだと沢木には思われた。そして、これまで誰にもいえなかった、赤い土で造られた李トショクが「イノムジャシギー」¹³⁾と叫びながら襲い掛かって、何も悪いことはしてないと抗弁する自分を殴りつける記憶が生々しく甦った。沢木はなぜすでに死んでしまった李景仁に対してこれほど執着するのか、そ

13) 本文(p.210.)において「イノムジャシギー」には「倭奴子息」という説明が付け加えられているため、作家はこれを日本人に対する罵倒の言葉として使用していることが分かる。しかし、「イノムジャシギー」は韓国語の発音からして単に「この野郎」という意味で受け取られることも可能である。

の理由を自分自身に問いただしてみた。李景仁は幼い沢木の心の中にある人間に対する信頼と憧憬の殻を初めて破った存在である。無論それは李景仁が沢木を裏切ったということではなく、沢木本人が知らなかった、いや知ろうとしなかった差別と蔑視、憎悪と憤怒、そしてそれらの感情によって個人間の友情と親睦さえ一瞬にして捻じ曲げられて砕けてしまう現実を、李景仁との出来事で痛感させられたのである。そしてその衝撃は幼い沢木に瞬間的な爆発力を伴って一気に襲い掛かってきた。もし李景仁がまだ生きていたら、二人は直接的な対話を通して互いの意見をぶつけ合うことができたかもしれない。しかし、すでに死者となった李景仁は、結局沢木が犯したあの日の過ちを永遠に取り返しのつかない過ちと失敗にさせてしまった。李景仁との出会いと別れを通して、植民地支配の不条理な現実には沢木は一瞬にして露出され、この出来事が彼の潜在意識の中に李景仁という人物を焼き付ける大きな要因となったのである。つまり、ここでは植民二世としての屈折した作家の植民地朝鮮に関する認識が描き出されている。つまり、植民地朝鮮において準支配者であった植民二世が、朝鮮人と日本人の境界線上において直視した植民地朝鮮の現実。この作品において沢木と李景仁との関係は単に朝鮮人と日本人の友情による美談として描かれておらず、朝鮮人に対する日本人植民者の露骨な暴政の一例としても描かれておらず、その時代に存在し得た人と人との関係性というものが内外の複雑な要因によって屈折し、また崩壊していく過程を一個人の体験という形式をもって示されている。曖昧な存在としての植民二世が朝鮮人との宙づりな関係を維持していくことに失敗したように読み取られるこのエピソードを通して、作家は支配と被支配の極端な二分法の中に埋もれてきた、その時代を生き抜いた人々の屈曲なる精神の背面を描き出そうとしている。

それでは李トショクの場合はどうだろうか。もし彼がまだ生きていたら、今日韓国に渡る日本人観光客たちに向けて、依然として「イノムジャシギー」と叫びながら暴力を振るっているだろうか。それとも彼が暮らしている田舎町へ来た日本人観光客に、植民地時代に習った日本の流行歌などを誇らしげに披露し、彼らと良い一時を過ごすだろうか。後者の場合において日本人観光客は李トショクが見せる

好意的な態度に、たぶん自分たちが犯した植民地支配の傷が長い歳月とともに風化してしまったと勘違いするかもしれない。しかし多くの韓国人たちの心の奥底には、植民地支配の残滓を通じて甦る過去の記憶が再び心の中の憎悪に火を付ける。作家はここで1960年代末の韓国と日本とをとりまく時代状況を作品の中に反映している。これまでの小林勝の作品群は主に作家みずから体験した幼い時期の植民地朝鮮での日常的な記憶の断片をノスタルジックに描いたものだったが、この作品では作品が書かれるまさにその時代の日韓関係の断片を描き出そうと試みる。小林勝がここで強調しているのは、たとえ日本人観光客の前に自らの植民地時代の思い出を懐かしげに振り返る韓国人がいたとしても、彼らに植民地時代の苦しい記憶を想起させる存在としての日本人観光客が続く限り、韓国人が納得する植民地支配に対する真摯な謝罪と歴史的な過ちへの清算無しで推し進められた人為的な相互関係は容易く崩れるということである。

李景仁と李トショクを通じて過去と現在の日本と朝鮮および韓国、そしてその中で生を営んできた朝鮮人と日本人の相互関係性を描いた小林勝は、続いてこれまでの両民族間の誤解と屈折の歴史を解きほぐすために、少しでもその役割を果たそうと努力してきた自らの運動家としての、また作家として歩んできた道を沢木とその妻の対話を通して振り返る。沢木はこれまで作家として自分の書いたものに責任をもつ姿勢をこれまで貫いてきたことを誇りに思う。しかし、今は後遺症のため良い文章が思いつかない辛さ、それ故に歴史という大きなページに有意味な一行を自らの業績で記すことができない、惨めな作家生活を振り返る。このような沢木に対して妻は、何としても未来に対する希望を捨てずにこれまで耐え凌いで来たように、これらかも頑張っていくことを勧める。この部分では作家自身のこれまでの物書きとして歩んできた過去に対する評価が読み取れる。作家として、また社会主義運動家として闘病と手術をへて、歴史という大きな歯車の中で己の短くつまらない人生の儚さに直面して苦悩する小林勝は、作品内の妻の声を借りて、まだそのような人生の絶望的な重さに屈服する時期ではないと自らを励ましている。

3.4 日本人植民者の「自己矛盾」

沢木は妻から人々と会うことを勧められ、周囲の環境へと眼をむける。しかし、沢木が出会う人々は戦後日本社会の一員として組み込まれた在日朝鮮人たちであった。中でも沢木と同じく慶尚南道の晋州出身で、敗戦後にサハリンから日本人妻と子供を連れて日本に住んでいる在日朝鮮人の荷次孝は特別な存在であった。戦後帝国日本の植民地支配に関する様々な資料を通してその実態を知った沢木は、以後植民者としての罪意識に苦しんできた。そして、その罪意識はこれまで彼が繰り広げてきた社会主義運動の一環として、朝鮮との連帯のための様々な活動¹⁴⁾を通して少しでもその重苦しい心の荷物を軽くしようと試みてきた。無論そのような罪意識の根底には先述した李景仁に対する罪悪感が横たわる。つまり、沢木のこれまでの行跡の根源には李景仁に対する差別的で侮蔑的な自ら犯した言動への贖罪意識に起因する。しかし荷次孝の息子が作った落とし穴に足元を奪われた沢木は、普段の在日朝鮮人に対する態度とはまったく異なる、非常識な行為に対して大いに怒りをぶつける。妻から荷次孝が一人息子である荷住男を学校にいかせないため、町で有名な悪戯っ子になってしまったのだと聞いた沢木は、直接息子の教育方針について彼に忠告する。しかし、荷次孝は今自分たちを在日朝鮮人がこのような生活を強いられているのは、全て沢木のような日本人による植民地支配の結果であると反論する。そして、自分の息子を日本人学校に行かせて半日本人として育てるくらいなら、一生教育などうけさせまいと反発する。その瞬間、荷次孝の姿に李景仁がオーバーラップされ、沢木の心の奥底の罪意識が甦る。沢木は妻に在日朝鮮人に関する累積された不満をぶちまけるのだが、それを聞いた妻の口からは意外にもこれまで彼が熱心に主張してきた日朝連帯の思想との矛盾が指摘される。

ここで沢木は日朝連帯という言葉が表面的には聞き心地の良い言葉

14) その一例として作品に挙げられている「火炎瓶事件」とは、作家小林勝本人が1952年6月25日に、朝鮮戦争および破壊活動防止法反対のためのデモに参加したとき直接行ったものである。この事件によって小林勝は約1年間刑務所で服役することとなった。

かも知れないが、結局は人と人との生活の中でその本音を聞きながら互いの葛藤と軋轢が絶え間なく存在するもので、むしろそのような姿が自然ではないのかと抗弁する。作家小林勝は荷次孝とのエピソードを通して自らの奥底に残存する差別意識というよりは、異民族間の信頼関係を築き上げることの困難さについて率直な意見を述べている。これは単に小林勝自身の問題としてではなく、これまで日本のいわゆる進歩的な知識人たちが見せてきた朝鮮半島を取り巻く過去と現在に関する偽善的な態度の一断面を暴く試みでもある。単に朝鮮人の側に立って彼らのために犠牲する、いわゆる善良なる日本人像から離れ、実質的な生活の中で在日朝鮮人と日本人とがお互いぶつかり合いながら感じる苦労とすれ違いの様子を、植民地支配がもたらした負の遺産が今の現実社会にいかにしてその陰を落としているのかを、加減なく示している。植民地支配に関して頭ではその過ちを認めながらも、感情においては在日朝鮮人という集団的な存在について不平不満を抱くありのままの日本人の姿が、また自身のそのような内面の矛盾を知って葛藤する日本人の姿が、ここに生々しく描かれる。これは、今まで十数年の間もっぱら朝鮮・韓国と関わりを持ち続けてきた作家小林勝ならではの自己批判的な告白に違いない。

手術前のある講演会で沢木は自分の主張に対して疑問を投げかける一人の男と知り合う。沢木は自分の意見に冷静に反論するその男の眼差しから李景仁の普段は優しくあった眼が一瞬にして恐ろしく変化するのと同じものを感じた。そして、沢木はいくら流暢な日本語で話していても、その男は間違いなく朝鮮人だと確信する。沢木は今回の手術後、彼に直接会いに行く。二人は朝鮮料理屋へ向い、沢木は幼い頃に植民地朝鮮で涎を垂らしながら見物した朝鮮の犬肉料理に関する思い出を浮かべながらもその男には話さない。なぜならばそのことによって自分が植民地朝鮮で生まれ育った植民者だということを相手に気付かれるのが恐ろしかった。沢木は在日朝鮮人たちが日本人植民者に対して見せるその無表情な顔つきの恐ろしさを知っている。思想の右と左を問わず、在日朝鮮人たちは自分たちを苦しめた日本人植民者に対して表面的には無表情で貫きながらも、内心極端な憎悪を覚えるということを沢木は知っていた。自分の主義主張にいちいち反論する南玄男

の姿勢から、彼を日本に潜入してきた無頼な朝鮮人スパイだと疑う沢木は、平常心を保とうとするものの自分がこれまで行ってきた朝鮮との連帯の努力が全て否定されるような気持ちにさせられる。そして、そのような自分の傲慢さを自覚させる媒介者として、李景仁と荷次孝、そしてこの南玄男という男が存在していると気付く。過去の自分を木端微塵に粉碎するこれらの存在たち、特に今眼の前にいる南玄男によって、沢木の不機嫌な気持ちは頂点に達し、彼を罵倒する言葉を心の中で叫ぶ。その瞬間、突然沢木の心の中に再び現れた声が、誰よりも朝鮮人について良く知っている自負する彼の傲慢さを叱責する。ここにおいて作家は再びこれまでの日本の左派知識人たちが見せてきた植民地朝鮮認識の断面を批判的にとらえる。戦後日本の社会主義運動を牽引してきた多くの知識人たちは、日本の国内に存在する在日朝鮮人たちを足掛かりとして表面的には彼らの權益を守り、自由と平等を声高に訴えながら彼らとの連帯を重視してきた。しかし、そのような言動の裏面では依然として朝鮮と朝鮮人たちを独立した存在として捉えず、日本との連帯という名の呪縛をかけて自己中心的な態度で接してき。これについて小林勝はこの作品の中で社会主義運動家として活動してきた沢木の思考の変遷を批判的に提示し、過去と現在を貫く日本と朝鮮との関係性について再認識を試みる。このような試みは作家の初期作品群における植民地朝鮮に対する自らの拘りが、むしろいまだに朝鮮と朝鮮人を日本の無形の植民地として捉える日本人総体が見せる宗主国的な意識構造について自己批判を伴って非難している。

診察のために再び病院へ来た沢木は廊下で一人の老人を見かける。そして、その老人もまた手術後の精神的な異常で悩んでいることを知るのだが、自分とは無関係なことだと傍観的な立場を貫こうとする。しかし、その瞬間心の中から再び声が聞こえる。果たしてその老人に今起きていることはお前と無関係なことなのかと。沢木は担当医との面談が始まると、過去に自分が宗安男に犯した過ちを繰り返してはならないと決心する。当時の沢木は病による疲労もあって四六時中繰り返される宗安男の悩み相談に付き合え切れなかった。次第に宗安男の話が鬱陶しくなった沢木は、担当医と面談の際に彼のことを善処して欲しいと何気なく話を切り出した。ところが、その沢木の曖昧な一

言によって宗安男は精神科病棟へと移るかわりに、強制的に退院させられてしまった。宗安男が最後に病室から出る日、沢木は彼の妻が自分を睨み付けていたことを今も忘れない。今廊下に座り込んでいる老人は沢木にとって第二の宗安男なのかもしれなかった。

沢木は担当医との面談の際に廊下の老人を指しながら、手術後の患者にとって医者への精神的な支えがどれほど大事なのかを熱弁し理解を求めた。発病以後、手術による後遺症によって自分の「語り」に自信をなくしてしまった沢木は、ここにおいて担当医を相手に一種の賭けに出ている。もし自分が今目の前の担当医を説得できるのなら、それは自身の「語り」の力が回復したことを反映する。そして、もし自分の「語り」の力が回復しているのなら、それは今の精神的な異常もまた元通りに戻る可能性があるに違いないと。沢木の話に耳を傾けていた担当医の顔に何か納得したような表情が浮かぶ。沢木は自分にはまだ誰かを説得できる力が残っていることを少しでも証明できたような充実感を味った。しかし、彼が担当医との面談を終えて診察室から出た瞬間、再び精神異常の症状が襲ってくる。そして、先刻自分が担当医を説得するのに成功したと思ったことに再び疑いが生じる。

病院を後にして再び肺臓の倉庫へと辿り着いた沢木は、これからの自分の進むべき道を悩む。肺手術によって以前のように走り回りながら社会主義運動を続けることは不可能であるが、自らの言葉で人々を説得できるという可能性はまだ残されていると考える。ここで足を止めて自らの課された宿命的な義務を放棄するか、それとも残っている力を振り絞って前へと進むべきか、沢木は容易に結論を出すことができない。そして、彼は今ここで立ち止まったら、それは生きながら死んでいるのも当然であり、自分の言葉で誰かの思想や考え方も変化させられるという、そのような可能性を微かに感じ取った時の喜びの為に、沢木は満身創痍の身体でまた再びの挑戦を決意する。

4. おわりに

本稿で分析した小林勝の「目なし頭」はその時間軸によって大きく二

つに分けられる。一つは沢木と李兄弟とのエピソードが繰り広げられる昭和13年の植民地朝鮮であり、もう一つは在日朝鮮人とのエピソードが描かれた1960年代の日本である。この二つの時間軸を沢木はある時は頭の中の声によって、ある時は肺臓が詰め込まれたビンによって往来する。作品の冒頭において肺手術以降、自分に襲い掛かった精神的な異常という後遺症に悩まされる主人公は、その異常状態によってこれまで忘れていた朝鮮人患者である宗安男のことを思い出す。そして自らが彼に犯した過ちを反省するその瞬間、今度は別の声が頭の中に聞こえ、彼の失われた過去の記憶を呼び戻そうとする。

医師によって二度と過去の肉体には戻れないと言われた沢木は過去との断絶を痛感する。過去と現在との断絶に苦悩する主人公は、今度は死者たちに肺臓が詰め込まれているビンの群れの前で昭和13年の植民地朝鮮へと移動する。そして失われた記憶の正体である李景仁・李トシヨク兄弟との出来事を思い出す。主人公に植民地朝鮮のありのままの姿を体験させてくれる優しい朝鮮人の李景仁。植民地朝鮮のヒエラルキーを転覆し、準支配者としての植民二世たちをその凶暴さゆえに苦しめる李トシヨク。ここで植民地朝鮮での体験を形作る二人の相反するイメージの交錯が繰り広げられる。しかし、優しい朝鮮人というイメージはまだ植民地朝鮮の現実を知らない主人公が作り上げた虚像にすぎない。独立運動の罪をきせられ拷問によって寝たきりとなった李景仁は主人公に冷酷な植民地支配の現実を突きつける。豹変した李景仁の態度に戸惑う主人公は彼に侮辱されたと思い、ついには言っただけならぬ差別的な言葉を心の中に吐き出す。この凄まじい出来事をいままで忘れていた主人公は、表向きには帝国日本の植民地朝鮮への支配を批判しながら、個人的な過去の過ちと失敗は忘却するという自分の二重性に気が付く。同時に主人公は肉体の断絶によって過去の呪縛から解放され、自らに課せられた運命から自由になれるという希望と、平凡な喜びが待つ未来へと進みたい欲望にかられる。しかし、その平凡な喜びが待つ未来とは、自らの宿命を放棄してこそ手に入れられるものだということもまた彼は知っている。

主人公の周囲には在日朝鮮人たちが厳然と存在している。在日朝鮮人である隣人荷次孝との葛藤はこれまで累積された主人公の不満を爆

発させる。しかし、その憤りと不満の根源に横たわるのは、彼らをそのような境遇に追いやった帝国日本による植民地支配の過去と、戦後日本における一部の進歩的知識人や社会主義運動家たちの内面に潜む差別的、宗主国的な思考に起因する。またもう一人の在日朝鮮人である南玄男によって主人公は自分の内部に潜在する差別的、宗主国的な思考の恐ろしさに気付かされる。自分自身の無力とこれまでの人生を通しての活動に対する失望、自ら蓄積してきたこれまでの課業に対する否定、日朝連帯を叫んできた自身の内面における朝鮮人への差別と不信感などが次々と襲い掛かる。切除された肺臓とともに、過去の不快な記憶と社会主義運動、そして作家としての活動をすべて停止させ、あらたな未来へと向かおうとした主人公の試みは、見事に過去と現在にまたがる存在たち—李兄弟、荷次孝、南玄男など—によって跳ね返される。そして、最後に主人公は自らの決断によって過去との断絶を回復し、その重みを背負ったまま、過去をありのままに受け入れることによって新たな道を切り開こうとする。その第一歩が最後の場面で病院で出会った廊下の老人患者に対する責任感による医師への説得作業である。

作品全般において作家の分身として主人公は自らの過去と対面させられたり、周りの在日朝鮮人たちや自分の妻にまで批判を浴びせられる存在として描かれる。植民者として生まれ、戦後の日本社会において自らの植民地体験に拘りながら創作活動を続けてきた小林勝は、その晩年において病気にたおれこれからの将来の生き方について苦悩したにちがいない。そして肉体的および精神的な安らぎをもとめる自分の内部に沸き立つ欲望に気づき苦悩したはずである。これまでの自分が築いてきた植民地朝鮮体験の形象化と、戦後の社会主義運動の推進と、その中での日朝連帯への努力など、そのすべてを包括する意味での「過去」と断絶して余生を楽にくらしていくことへの欲望との葛藤は凄まじいものであったに違いない。しかし、おのれの頭の中に厳存する植民地朝鮮への贖罪意識を伴う関心と、在日朝鮮人たちによって喚起される戦後日本社会における植民地統治の未解決の問題を様々な事物たちの声をもって自らを奮い立たせようと試みたのであろうこの作品は、いわば作家がその転換期において自らを過去と繋ぎとめるなが

ら重い一步を踏み出すための刺激となったに違いない。この作品によって再び植民地朝鮮を語るという行為を続ける決心を確固たるものとしたからこそ、以後の代表作である「蹄の割れたもの」が世に出られたと言っても過言ではない。

参考文献

- 池田功(1991) 「小林勝における朝鮮—植民者二世の屈折」『明治大学大学院紀要』第28集、明治大学大学院、pp.1-19.
- 磯貝治良(1982) 「原風景としての朝鮮—小林勝の前期作品—」『季刊三千里』第29巻、三千里社、pp.207-217.
- 川村湊(1996) 「小林勝外伝」『文学界』5月号、文芸春秋、pp.278-296.
- 小林勝(1970) 「目なし頭」『チョッバリ』三省堂、pp.156-289.
- _____(1976) 「小林勝略年譜」『小林勝作品集』第5巻、白川書院、pp.398-406.
- 田所泉(1967) 「『故郷』と作家との関い—安部公房、小林勝、高井有一の最近作をめぐって」『新日本文学』12月号、新日本文学会、pp.136-143.

성명(한글) : 최준호

(한자) : 崔俊鎬

(영문) : Choe, Jun-Ho

논문영어제목 : A Study of "Menashi Atama" by Masaru Kobayashi :
Inheritance and Disruption of the Past.

소속 : 전북대학교 일어일문학과 강사

E-mail : junhochoe@hotmail.com

투고일 : 2014년 3월 30일

심사일 : 2014년 4월 3일

심사완료일 : 2014년 4월 29일